慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近世資本主義起源考（五、完）
Sub Title	
Author	阿部, 秀助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.6 (1922. 6) ,p.769(29)- 777(37)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220601-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

て此問題が重要問題として論せらるゝ事は事實上此時を以て限りとし、J. S. Mill の如きも「此問題に關して云ふべきことの如何に乏しきかを示すに過ぎずとするも、之に觸るゝことを必要とす」と云ひ、結局に於て斯る尺度の得て求むべからざることを論結したり（A. C. Whittaker, History and Criticism of the Labor Theory of Value in English Political Economy, 1904 p. 89）。故に Ricardo の價値學說は價値の原因說明としてのみ後世經濟學に大影響ありたるものなり。而して後世經濟學者は Ricardo の價値學說に許すに果して如何なる待遇を以てしたるか。又今日の理論を以てすれば Ricardo の學說には果して幾許の取るべきものと捨つべきものとを含めるか。予は姑らく玆に筆を擱き、別に稿を改めて此問題を論ぜんと欲す（完）。

近世資本主義起源考（五・完）

阿部秀助

七

中世紀末の歐洲に於て特に吾人の眼に映ずる經濟現象は所謂有產階級なるものゝ勃興である。試みに當時のアウグスブルグに關してヤコブ、ストリエデルの精緻なる研究によれば次の如き資產增加の狀態が示さるゝのである。（一）

年號	人數	資產總額	資產の最少額
一三九六年	七四人	二一一四八二フロリン	一二〇〇フロリン
一四六一	一六〇	四七二〇二六	一二〇〇
一四六七	六三	三〇一七三四－六〇三四六八	二四〇〇フロリンより
一四九八	一四三	一〇八六四七四－二一七二九四八	四八〇〇フロリン迄
一五〇九	一二二	一二九五八六七－二五九一七三四	三六〇〇フロリンより
一五四〇	二七八	五一一〇七八三－一〇二二一五六五	七二〇〇フロリン迄

更に同市に關した第二の調査表として

年號	納稅者數	增加數	增加率（%）
一三九六	二九三〇	一八〇〇	六一・四
一四六一	四七三〇		
一三九六	七四	八六	一一六・二
一四六一	一六〇		

勿論、此時期以前に於て其處には全然企業家又たは資本家なるものが存在せざりしことを意味するものでない。例者、カール大帝と同時代に輩出したラントフリド及エヂヘリの如き其他、リュベックのニコラウス・ブロウェーの如き人物が何れも之れが資格を有するものである。此點に於て論者は中世の企業家を以て日常生活に必要な材料を求めし以外に何等の餘裕を有せざりしとなすビュヒャー一派の説に迎合するものでない。蓋、西曆八世紀の初期に於ける歐洲殊に以太利及ゴール地方に於ける羅馬の經濟組織が破壞せられし當時の社會は殆んど純然たる農業組織の上に築かれしもので、時に農產物を多く有せし地方から之れが缺乏せし地方に輸送せられし以外は是等の收穫物は廣大なる地面を有する豪族の手中にあつて未だ商賣用に使用せられしことなく只だ葡萄酒と食鹽とは當時既に一個の商品として取引せられしもので、而して之れが轉賣に從事せしものは一時的に商賣を營みしものと他は多く半ば商人たり半ば掠奪を事とせるもので尙ほ今日亞弗利加大陸の黑奴間に出入する亞剌比亞商人の如きものである。例者、八世紀の初期エルベ河方面に於て一種の冒險的商業を營みしサモの如き之れが典型であるが然かも斯くの如き徒輩を以て將來に於ける資本家の祖先と見做すことは不可能である。其他、同時代の大地主が其附近の市場に於て自己にとりて必要なる商品を求め且つ自家の需要を超過せる穀物又たは葡萄酒を賣出せしことあるも其處には何等資本主義的傾向を見出さないのである。更に地勢上より發達せし商業地、例者、海岸地方にあつてはマルセイユ、ルアン、の如き河流地方殊に羅馬時代の國道が河流と相交れる地、例者メッセ河畔のマーストリヒト或はシェルト河畔のヴアレンシェンヌの如き何れも當時に於ける貨物の陸揚場所又たは船乘の冬營地に供せられしもので。斯くの如き聚落地を以て之れを以後の都市に比較すれば其間著しき相違點を有して居るのである。即ち前者に就きて見れば前者は市其者

を圍む城壁なく建物は多く木造で之れが住民は常に不定で、彼等は何等の特權を有せざる點に於て後ちのブルヂョアと異なつて居るのである。次ぎに信用制度に關してカロリンガ朝時代に既に公債なるものが存せしことは明白なるも但、此公債なるものは火災、戰爭、凶歲の如き場合に多く見しものにして之れを以て資本主義的運動の存せしものと見做すを得ざるのである。要するに中世の初期は殆んど資本の勢力を無視せし時代にして彼の富有なる地主と修道院とに集積せられし財產は企業的には何等の要をなさずして殊に大地主の如きは小作人より集め し收入を以て紀念碑の建立、美術品其他貴重品の購入に費したのであるが斯くの如きは社會的見地より觀察せし場合には或は必要ならんも之れを經濟的方面より觀察する時は殆んど何等の用をなさなかつたのである。何んとなれば彼等の財產は商人の手に渡ることなく隨つて商業上の活動を助長する要素となり得なかつたのである。然るに十世紀末から十一世紀の初期にかけて商業的活動は主として以太利及ネーデルラント方面に發生するに至つたのである。即ち前者にあつて活動の中心をなせしものはヴェニス、ピサ、ゼノア等で是等の都市は專ら東羅馬帝國及回教國を顧客として沿岸貿易に從事し、其取引狀態は絕えず增加し發達したのである、後者はブリュージ對英國、北部獨逸地方及スカンヂナヴィヤ方面で之れが取引狀態は其初期に於ては尙ほ沿岸方面に限られしが漸次內地方面に擴がり十二世紀の初期に於て南北歐洲の聯絡を見るに至つたのである。例者、千百二十七年ロンバルト地方の商人はアルプスを越えてシャンパーニュ及ネーデルラント方面に現はれしが如きである、又、商業上、發達せし都市には漸次地方より農民の移住を見るに至り、而して是等移住者中より當時の商業界に於ける水先案內者たる人物が輩出したのである。例者、フッサンチェルのゴットリックは之れが典型的人物で彼はリンカルンシャイヤーの憐む可き一農民に過ぎなかつたのであるが其後、商業に身を投ずると共に專ら英國、蘇格蘭、丁抹、フランダー方面の貿易に從事して巨額の富を集積するに至つたのである。要するに十二世紀の末期迄の歐洲都市の人口は比較的少く只だ地の利を占むる處のみ、比較的多くの商人を吸收したのである、而して當時に於ける都市は工業よりも力を商業に注ぎしもので市內に手工業者を集中せしむる事は當時尙ほ不完全で、只だ商人が葡萄酒穀物と共に輸出した

商品は衣料の如きもので、之れも都市其生産にあらずして地方の産物であつたのである。次ぎに十三世紀は西部歐洲方面にあつては大小都市の發達せし時代で市其者に於ける富の集積が增加するに至つた事は都市其者を漸次工業化するに至つたのである。加ふるに田園の荒廢は地方に住せし手工業者をして市内に入らしめ彼等の多くは其附近地方に産せし豐富なる原料に加工して玆に特殊的工業の發達例者織物業又たは金屬工業の如きもの丶發達を可能ならしむるに至つたのである。而して此時代の都市には自から大都市と地方的都市とが存して居たのである。即ち前者にあつては既に輸出向工業に見る可きものありて例者フランダー及以太利地方に於ける織物業の如く、是等は單に地方的市場を目的とせしものでなくて寧ろ歐洲其者の市場を目的としたのである。其他以太利、英國、佛國殊に北部獨逸の都市の如きは全く海運業に從事したのである。次ぎに地方的都市は地方的交通を以て滿足せしもので彼等の生産物は多く市内及其附近地方に仕向けられしと共に一方には其附近の地より食料品の供給を受けしものである。而して斯くの如き都市の特徴としては生産者と消費者との直接的交換、其地方的市場に外國商人の入るを好まざりしこと、商工業上に幾多の制限的規定の存せしこと資本主義に反對する傾向換言すれば大なる事業、資力大なる商人の存せざりしことである。然かも是等の地方的都市も經濟的發達につれて漸次國際化し、市内に於ける有産階級も之れに比例して增加するに至つたのである。而して斯くの如き傾向の最も大なるに至つたのは十五世紀である、抑も此時代に於ける有産階級增加の第一源因は略ぼ千四百年前後より發達せる一般の需要額である。即ち此點に關してシュモラーが其傑著「ストラスブルグの織匠組合」に記せる中に「羊毛輸出の增加は之れが全製品の輸入を相匹敵し、千四百一年、千四百六十一年、千四百七十七年のストラスブルグの商店條例の一部は的確に奢侈的傾向の增加、遠近の地方より齎らさるゝ優良品や普通品の仕入の增加を意味し千四百一年には單に一種の絹織物のみなりしが千四百七十七年には八種乃至九種の絹織物に區別せられ、千四百一年にはストラスブルグの織物を供給する地方は獨逸にて六個所乃至八個所ありしが千四百七十七年にはライン産の織物のみにて二十二種區別せられ、ニーデルライン、マグデブルグ、シュワーベン、瑞西より羊毛はストラスブルグ

の市場に齎らされ、フレミン及プラバント方面の織物は佛、英、以諸國の產と相共に輸入せられ、其他、英國產の羊毛、ライムス、キョルン、エルフルトの撚糸、マイラント、方面の綿花等は非常なる活氣を呈し殆んど千五百年に至る迄商業は非常なる膨脹を遂げたのである。(二)次ぎに第二の源因は副業として又た主として以太利人により て營まれた金融事業が各方面に數達し殊に南部獨逸に於いては貨物取引よりも大明貸を撰ぶに至つたことである。(三)更に第三の源因は十五世紀の中期以來主として獨逸方面に於ける鑛山事業の利益が著しく增加するに至ると共に有產階級の上に集積せらるゝに至つたことである。而して是等の階級に於ける資產を構成せし原始的形態に就きては今日迄學者の考察せし處には凡そ三個の主要なる説が存するのである。即ち第一説は商業的集積地で第二は吾人の商行爲を離れて之れを都市の內外に於ける地代に求めんとする地代説で第三は以上兩者の折衷説と見る可きものである。第一説の代表者は白耳義の史家ピレンヌで彼の云ふ處によれば十一、十二兩世紀に於ける巡回的商業によつて集積せられし資產は其後速かに土地經營に放下せられ、十三世紀には地主的豪族 (Veri, Hereditarii, Divilei, majores) の階級を見るに至つたのである。而して都市に於ける人々の增加は地代の騰貴となり、彼等をして益々富ましむるに至りしかば其祖先は商業を營みしに不拘、彼等は商業其者より遠ざかつて專ら土地收入によつて有裕なる生活をなし彼等の或者は王侯の城廓に匹敵する宏莊なる石造の建築物に住し、或者は市政の樞機を握り、又、或者は貴族と婚を通じて武士化せしものあり斯くて資本主義の第一時期に於ける資本家階級の多くは商業界より退きて玆に當時の經濟上に新たなる變化を生ずるに至つたとなすのである。勿論、ピレンヌは既に十三世紀以前に自由なる資本主義的發達の一時期あることを肯定するもので只だ此資本主義の特徵は集合的資本主義なるを以て之れを活動せしむる能力を缺ぐ場合には彼等の事業は自から衰微し、沈滯するのである。斯くて彼は理智は資本主義の基礎となすものなりと云つて居るのである。(三)　(完)

總目次編制の都合上一時完結するとゝせり、他日續論を起稿すべし